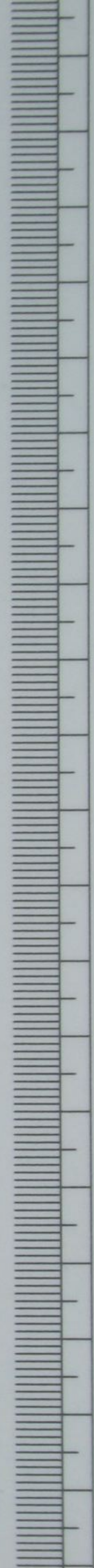


朝

集句三第樓碧一

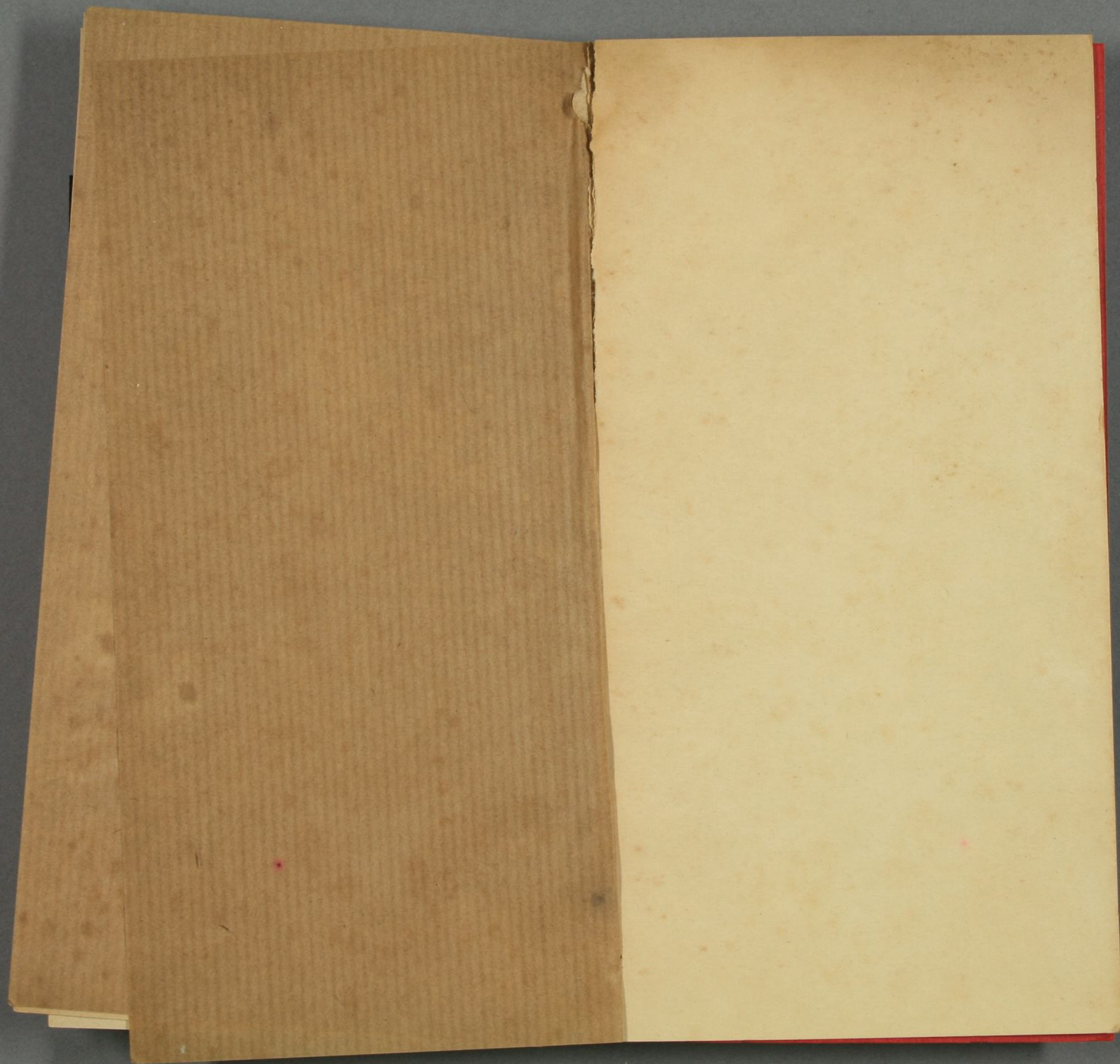


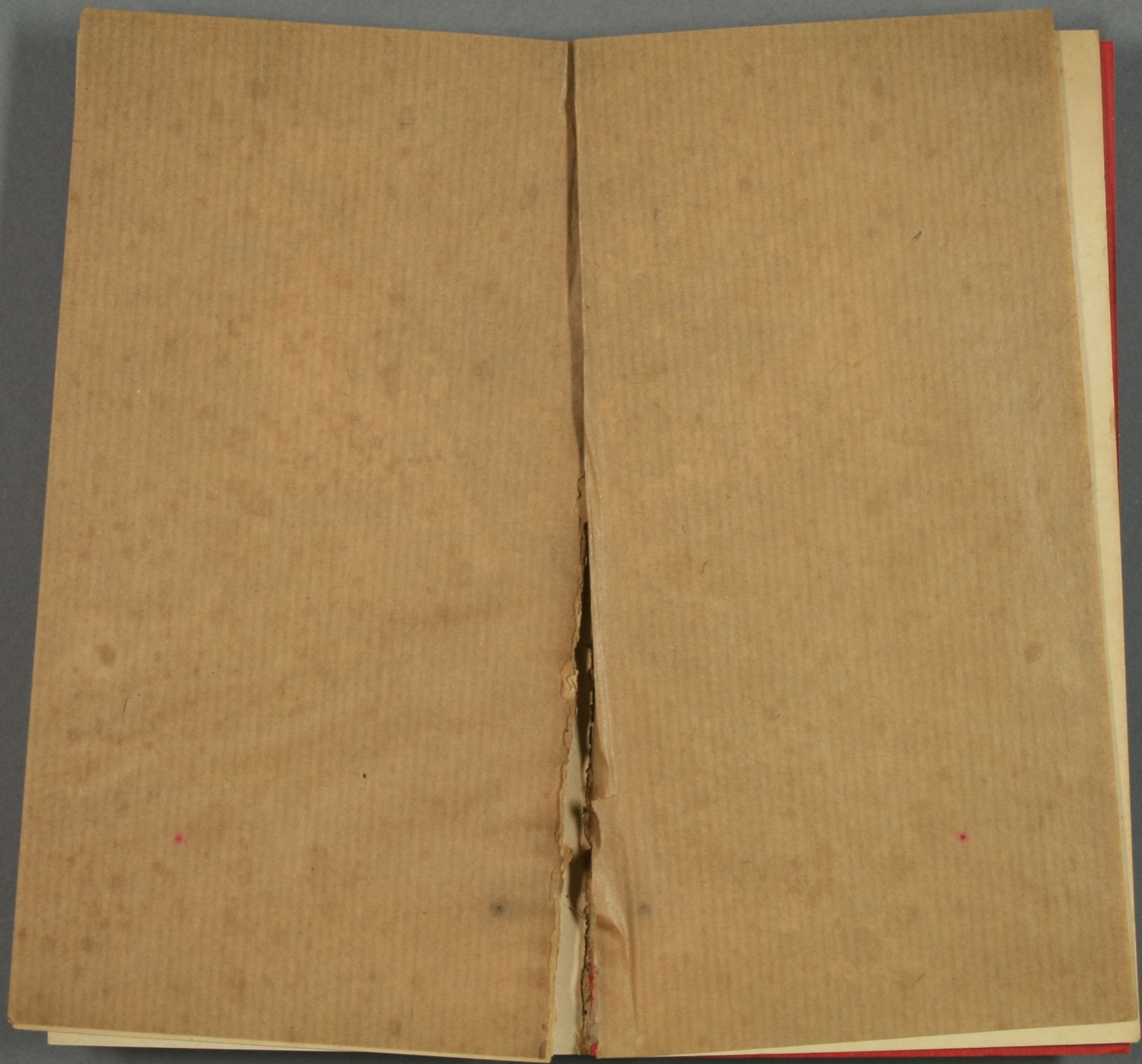
40

45

50

55





朝

いけない。  
いくら厳選して抄出して見ても、やつぱり句がざつばくだ。  
いけない。  
句が浮はついでゐる。

もつと自分の本音を吐きたいもんだ。  
もつと、性根を据ゑて。

一 碧樓第二句集發刊後、大正九年十月から大正十三年八月までの作より選抄して此一集をつくる。

大正十三年初秋 於玉島

一 碧樓

大正十三年作

一つの星のほかなるや星のつらなり

あはれ蟬のうまれ出でし木のもと

門を出でしいまつきしろのそら

秋風立つ山の松根をはり



のうせんかつらの花咲けば家の庭

夜のいとしきものに見せて日焼けの顔

門外の水田へ來る人々の朝な

訪ひよりし雨のふりしぶき軒柱

日出で、道のべのけふの苗代

水をのみこぼしのみこぼし家のかげに

草の匂ひ人の家々のかさなり

朝の潮満ちくる街の家並みのみだれ

雀はたちて地の暮れてくる

家のみちの竹の實のりたるしらけ

山を出で、ゆく日のひかりのぬぐみ

明王院下山

ねむはまださかぬ川のうねりうねり流れ

子鴉のなく雲の流るゝ

麻のしげりいのちををしみ

けふを掛けて麥扱の二三日の家かげ

柴山湯の柴山  
鴉巢をまうて沙におりこす



桐の花咲きし吹きくる風

舟人の夕ぐれとなりし帆柱

干底ふりかけの雨おちそめた水の面

檜の束を解く二束

風吹き鳴る松毬をひろひとり

すこしばかり雲をうつし山の尾の池

二つおきたるほのかなるひかりすよるのすゑもの

夕風が鳴る飯を食ひお茶をのみたり

海を打つ一風し鳥々は遠く

夜が明けた帆ばしらのもとにねてゐるこども

冬夜のちさい手燭を乗り家のうちに

家のうしろ夕かけてあらはるゝ干潟

山々の明けの春河の流れ

大正十二年作

空薄うくもり雀が群れて来る巖

すこしばかり落葉掃きよせる身をこども



やまなみなみうつ冬となる西山をかけて

かがどのたかい靴でそつと来て下さい冬夕べ

となりあふ家々の霜の旦

傾きもなく沙に埋れようとしてゐるベンチ

歸りつきしも蕎麥の花かれの家のうしろ

稻の秋の風吹き流れ二つ並びの山

家  
か  
げ  
の  
赤  
い  
枯  
草  
に  
轉  
び  
た  
く  
て  
ゐ  
る

蠟  
燭  
の  
あ  
か  
り  
に  
て  
見  
え  
る  
こ  
ご  
も  
の  
顔

震災一句

栗の木の花の残りし見える

小母さんのうせんかつら咲きましたのうせんかつら

立つて田圃の遠くの灯を見てゐるこども

雨の日のこどもとあそぶ太鼓を打ち太鼓ころばし

日暮れの一脚の椅子を倒すひどきもなく

鳥に鳴かるゝ朝の單衣きてゐる

たかむしろ冷えくる二人話してゐる

けふのさゞ波の水に踏み入りて貝拾



二人が背を見せて  
苺畑にゐる

春の夜低い停車場にはいる人々とはいる

けふ行かぬさどなみたつ沖のいけす舟

船の窓のまるい一夜さの人々ど

沖の岩小潮一日の雨ふりやまぬ

春の夜先生のうしろから一禮する

冬木のもとに屯す人ら音をたてず

家を風吹く家の溝々つぶれ

幾人越す赤土山雨ふりしぶき

こどもたはむれあそぶ一脚の椅子の春の夜

春の田の二三まいうちつらなりし水

磯の雪とけそめた浪打ち來る

日くれぐれ女は眉をつくり部屋を出づる

鴨打の舟の戻りつきし渚の波

ちりの橙をしほりあふ宵のほごでした

さむい夜の階段をおりる母をうしろにして



犬が來る冬夕の軒下ふかく

大正十一年作

焚火を去る足音をたてゝ

電柱と立つ篠懸の木の葉の残り

冬夜の低い椅子にかけて下さい

いしだゝみへ冬木のひくい枝々

冬木につきあたる徑をゆく

こどもが顔見せた山がかる枯草の中

西風の小鳥が下りる徑の上に

稽田にまろぶ子を持つてゐる

徑歸らむとすわが顔に咲ける曼珠沙華

手の先の顛へ露朝の門をあける

野菊のうすいいろにわれらがからだまるばす

石や石屑や夜明けたる石屋のこどもです

瓜を噛ぢるさびしさにあるいてゐる

雨雲のひかりにすがり歸りたき工女



雲のぬくみ藪中の竹が葉落す

雨夜の身をまかす小さい窓をあけてゐる

自然と葱畑へ来てしまつた葱の中

なくくさの日はや星さまの西の空

夫とし妻としなゝくさ一日の霜柱

大正十年作

地のたそがれのぬくみ石垣に寄りむとするも

晨よ草よ地をかけためぐり祈り

萬燈が坂をのぼり來る坂の上

夏夜のこゝに小皿一枚も消え失せないであらう

つんく葎の立つ道を行く少女ら

一禮すにんげんのあたま黒く音もしない

春の夜を眠る乳を包み

くがいの春の夜の盃洗の水

春の白雲が遠くて漁師の子供です

枯芝の丘の家から誰も出て来ない道



正月の白浪の島の人ら來ず

大正九年作

爐話の嘘をゆるす赤い馬車も出て來い

無産階級の山茶花べたべた咲くに任す

23/22

大正十三年十一月十二日印刷  
大正十三年十一月十五日發行

定價金一円

著作兼發行人

塚直三

印刷人

中藤次

印刷所

玉島活版所

岡山縣淺口郡玉島町新町

發行所

海紅社

岡山縣玉島町柏島八〇二

